

緒論

第一部 岡山後楽園

小野芳朗 13

第一章 近世の御後園……………16

第一節 大名庭園としての御後園……………16

第二節 水田と「御後園用水」……………24

まとめ……………37

第二章 近代の後楽園……………38

第一節 後楽園と東山開発……………38

第二節 都市計画公園と後楽園……………63

第三節 借景と風致……………85

結章……………106

コラム1 大名庭園の価値づけ——後楽園の水を巡る言説……………127

第二部 金沢兼六園

本康宏史

135

第一章 近世の兼六園

..... 138

第一節 「兼六園」以前の兼六園..... 138

第二節 「兼六園」の呼称をめぐって..... 142

第二章 近代の兼六園

..... 147

第一節 「兼六公園」の誕生——庭園から公園へ..... 147

第二節 「日本三名園」というブランド..... 157

第三節 「大名庭園」の創設..... 164

第四節 二つの銅像と「加賀百万石」の記憶..... 173

第五節 慰霊と顕彰の都市空間..... 206

結 章

..... 212

コラム2 「兼六園」のシンボル..... 226

第三部 水戸偕楽園

三宅拓也

229

第一章 近世の偕楽園

..... 232

第一節 偕楽園の成立..... 232

第二節 士民への公開と利用..... 235

第二章 近代の偕楽園……………	237
第一節 偕楽園から常磐公園へ……………	237
第二節 東京からの遊客と行幸啓……………	252
第三節 観梅列車と観梅デー……………	264
第四節 藩祖顕彰と常磐公園——幻の徳川光圀像建設計画……………	281
第五節 「近代」の視点による再評価……………	297
結 章……………	309
コラム3 もうひとつの公園——弘道館……………	325
第四部 高松栗林公園……………	331
第一章 近世の栗林公園……………	334
第一節 「三名園」に優る「公園」……………	334
第二節 栗林荘の成立……………	335
第三節 栗林荘の歩き方——江戸時代の鑑賞ガイドブック「栗林荘記」……………	336
第二章 近代の栗林公園……………	339
第一節 明治初期の栗林公園……………	339
第二節 博物館建設と公園改修——明治三〇年代初頭の公園整備……………	349
第三節 名所としての宣伝——関西府県連合共進会と旅行ガイドブック……………	372

三宅拓也

第四節	北庭改修——大正初年の公園整備……………	379
第五節	観光のネットワーク——市内交通の発展と史蹟名勝・国立公園……………	398
第六節	公園内施設の多様化……………	406
結 章	……………	419
コラム 4	岡倉覚三がみた栗林公園……………	435

おわりに

収録図版一覧
索引(人名・事項)

緒論

小野芳朗

◆日本三名園十栗林公園

本書は大名庭園の近代を論じている。多くの大名庭園に関する著述は、それが成立した江戸時代中期から後期の歴史を書く。大名庭園が近世の産物だから当然ではあるが、明治以降は等閑視されているといつてよいだろう。近代には、廢藩置県による旧藩王家の事情などにより所有者の変遷が生じるため、庭園を巡りさまざまな現象が起こる。池がどうなる、建物がどうなったというフィジカルな面だけではなく、大名庭園とその周辺で起こる諸現象、それを近代の都市の成立、経営と絡めて編んでいくのが本書の目的である。

本書で扱うのは岡山後楽園、金沢兼六園、水戸偕楽園、高松栗林公園。いわゆる日本三名園^{プラス}十一である。いずれも一九二二(大正一一)年に名勝に指定されている。大名庭園として最初に顕彰されたものとして本書では取りあげた。各庭園について、近世の庭園の事蹟に若干触れたのち、軸を近代に置き、それぞれの都市が近代化していくプロセスのなかで、各庭園がどのような機能を持つていくのか、ステークホルダー(利害関係者)はどのような意図を持つてどのような行為をなすのか、名勝に指定されたことは何を意味しているのか、などの議論が展開される。

なぜ全国に数ある大名庭園(江戸上下屋敷と国元を単純に数えても約千)や京都に多数作庭された寺社の庭園を差し置いて岡山、金沢、水戸が三名園なのか。詳細は第二部「金沢兼六園」で本康宏史が触れているが、ここでも本

書の導入としてそのことに触れておきたい。

結論からいえば、答えは明治天皇の行幸である。天皇のブランド力がこれらを三名園と称せしめた。庭園史家小沢主次郎は「明治庭園記」のなかで三名園の呼称を俗称であると批判している。「畢竟日本三名園の題目は、一笑をも値せざる俗評⁽¹⁾」であると。後楽園については「岡山公園は、元来幽邃⁽²⁾の到に乏し園趣なるに、天覧後に、清掃整潔、限界殊に瀟麗⁽³⁾なりしかば、益す其宏壯を覚え」とあり、天覧によつて整備されたとある。一八八五(明治一八)年三月、明治天皇は山陽巡行の折に後楽園に行幸し、旧藩主池田章政侯爵が三日間饗応した。このことが新聞紙上に報道され一躍全国的に有名になる。

同様に金沢兼六園(兼六公園)は、本康が明らかにしているように、一八七八(明治一〇)年の北陸巡行の際に明治天皇が行幸した。水戸偕楽園(常磐公園)は一八九〇(明治二三)年の明治天皇・皇后の水戸行幸啓の時に、皇后のみが偕楽園に行啓した。その後、本書中に明らかにしたが、日本三名園となったブランドを大正年間に学者らが再顕彰し、高松栗林公園を含めて一九二二(大正一一)年、史蹟名勝天然紀念物保存法(現在の文化財保護法)による「名勝」に指定されるにいたる。

日本三名園という呼称がいつごろから流布していたのかは明らかではないが、正岡子規が一八九一(明治二四)年八月後楽園来訪時に求めた絵葉書に自筆で「岡山後楽園 日本三公園ノ一はつきりと垣根に近しあきの山⁽⁴⁾」と書いており、水戸偕楽園の行啓の直後には三名園のブランドができていたとわかる。むしろ金沢と岡山が明治天皇の行幸で著名になっていたが、「二名園」ではおさまりが悪い。そこへたまたま水戸への行啓があったので、行幸ではなくても合わせて「三名園」といい始めたのではないだろうか、というのが若干の想像を交えた筆者の解釈である。

◆公園としての大名庭園

さて大名庭園を「公園」と呼んでいることを訝しく思われる読者もあるかもしれない。事実「公園」が正式名称であった時期がある。日本で最初に法制化された「公園」は一八七三(明治六)年の太政官布達第一六号による、いわゆる太政官公園と呼ばれているものである。それは「三府ヲ始人民輻輳ノ地ニシテ古来勝区名人ノ旧跡等は迄群集遊観ノ場所」であり、「従前高外除地ニ属セル分」とされた。つまり年貢などを免除された土地である除地のうち、検地帳外の土地、高外除地を指し、具体的には明治四(一八七二)年の土地令によって官有地となった社寺境内地や藩主庭園、城内が各府県で公園に充てられた。⁽⁵⁾この時、官有地となっていた兼六園、偕楽園はそれぞれ兼六公園、常磐公園として登録された。だから「公」園なのである。岡山後楽園は一八八四(明治一七)年まで池田家の所有であったが、この年に岡山県に有償譲渡され「岡山公園」とも呼称される。

この日本の「公」園の目的は、西欧にある Public Park という市民社会の権利としての良好な都市環境や運動する空間の享受を目的とした文明の施設を模しているのではあるが、一方で上地した土地の活用の意味もあった。それゆえ、公園指定は官有地に限られ、私有地は認められていない。むしろ National Park と呼ぶにふさわしい。⁽⁶⁾大名庭園が官有地であるがために、そこでは官製の行事が執り行われるようになる。県会、招魂祭、陸軍演習の本営などに加えて、博覧会、共進会や各種公の団体の行事や展覧会などが行われる。催事のみを見ていると、近代の大名庭園は一種の市民広場の様相を呈している。転機が訪れるのは大正に入ってからである。

◆公園が文化財か

一九一九(大正八)年成立の都市計画法と史蹟名勝天然紀念物保存法は、大名庭園が都市計画上の公園なのか、名勝としての文化財なのか、という庭園の将来を左右する議論やそれにとまなう諸現象を生み出した。そこに関係してくるのが、林学者や造園学者といったいわゆる学識経験者である。

そもそも庭園研究は近世を含めて実態把握が難しい。なぜなら庭園内の建物に関してはある程度の図面資料を

もって再現できるのであるが、庭園の植生は変化するため、その原初的な姿の実証や再現が困難なのである。一体、何をもってオーセンティックな景観とするか、議論の余地がおおいにある。ここに学者という発言力の大きい職業人が出現することで、彼らの研究、彼らの発言が庭園の性格を左右するという現象が起こる。本書は大名庭園の近代を語るのではあるが、こうした学者を含む学識経験者による価値づけがどのように起こるのか、にも興味を抱いている。日本三名園は、大名庭園のなかでは日本で最初に名勝として顕彰されていく。むしろ日本三名園の名が最初の名勝指定をもたらした、といってもよい。

◆大名庭園の近代

本題の三名園＋栗林公園に入っていく前に、この四庭園に加えいくつかの大名庭園の事例を概観してみる。

岡山後楽園

創始者である池田綱政が御後園ごこうえんとして利用を開始したのは元禄二（一六八九）年である。その後の

歴代藩主の「好み」により御後園はさまざまに利用される。そのことは神原邦男の『大名庭園の利用の研究』（吉備人出版、二〇〇三年）に詳しいのでここでは割愛する。

近世にも参勤交代で藩主の留守の間に一部領民に見せたという記録があるが、明治四（一八七二）年には「後楽園」と名を改め、縦覧規則により入場を規制しながら公開した。翌年池田家が御城より移り住んで再び閉鎖される。そのため一八七三（明治六）年の太政官布達による「公園」にはならず、後楽園から眺望する操山みさわやま山系の南端、幣立山へいたた一带を「偕楽園」と名づけて公園化する。一八八四（明治一七）年、後楽園は岡山県へ有償譲渡され、以後県の管理となる。翌一八八五年、明治天皇の行幸が新聞紙上で全国に報道されたことで後楽園は有名になる。園内では岡山県会が開催され、一方で最後の藩主章政を囲む士族会や藩祖光政を祀る閑谷神社しずたにの遥拝所しんがらが設置される。一九一〇（明治四三）年には陸軍特別大演習の大本営が置かれ、明治天皇が再び行幸した。

やがて大正時代に入り、造園学者田村剛の顕彰により名勝に金沢兼六園、水戸偕楽園、高松栗林公園とともに

指定される。大正から昭和にかけては都市計画公園への編入が議論されるが、結果的に文化財として位置づけられ今日にいたっている。

金沢兼六園 金沢では五代藩主前田綱紀により、百間堀を隔てた御城の対面に「蓮池御殿」が作られる。現在の兼六園の低地部である。その庭園の後背地の高地部(千歳台)に二代斉広が竹沢御殿を建てる。斉広没後、御殿は取り壊され、庭園化することで現在の兼六園の原型ができあがる。このことは岡山後楽園とほぼ同時期に作庭が始まりながら、プロセスはかなり異なる。

明治四(一八七二)年、「与楽園」の名で一般公開され、翌年には金沢理化学校ができる。前田家から石川県に譲渡され、そして一八七三(明治六)年の太政官布達による「公園」となり、翌年「兼六公園」として開放されることになる。その後、一八七八(明治二二)年の明治天皇行幸、一八八〇(明治一三)年の明治記念標・日本武尊像の建立など天皇イメージが付着するが、「公園」として市民広場の機能も強い。明治二〇年代からは園内で招魂祭が開催されるようになる。この点、岡山では後楽園から臨む山塊・操山に太政官公園と招魂社を置き、機能を外部化しているところが異なるが、金沢でも兼六園の東北、卯辰山には招魂社や前田家所縁の観音院や八幡宮などの祭祀空間としての外部機能が存在していた。しかし兼六園が公園として位置づけられたため広場機能は岡山よりも濃厚である。

そして顕彰と価値づけが大正年間に始まる。それをなしたのは、保勝運動をなした加越能史談会と、東京帝大原熙、本多静六、田村剛など園芸学、林学、造園学の権威たちであった。同じく一九二二(大正一一)年に「金沢公園」として名勝となり、同二四年に「兼六園」と改め文化財となる。

水戸偕楽園 水戸偕楽園は、第九代藩主徳川斉昭によって天保一三(一八四二)年に築かれた。斉昭は藩内巡視の末に水戸城の西方約二・五キロ、千波湖を望む景勝の地に自ら位置を定め、梅樹を植え、好文亭を建てて偕楽

園を開いた。斉昭が『偕楽園記』に記したように、偕楽園は当初から士民の保養の場となることが意図されていた。後楽園や兼六園に比べると作庭時期は遅れをとるが、一定の制限はあったにせよ士民の入園が許された点は特筆されよう。なお、水戸藩の江戸上屋敷に築かれた庭園が、かの小石川後楽園である。藩祖・頼房が寛永六（一六二九）年に築庭して以来、江戸定府じょうふだった水戸藩主の生活に密着した庭園として代々の藩主に愛でられた。

明治四（一八七一）年、廃藩にともなうて偕楽園の地は県の管轄するところとなる。この頃、園内には第二代藩主徳川光圀と斉昭を祀る祠堂が置かれていたが、神社創建が認められて一八七三（明治六）年に常磐神社の号を受け、翌年には園の一角を拓いて社殿が造営された。この間に、偕楽園は太政官布達に基づいた「公園」となり（一八七三年二月）、のちに「常磐公園」と称されるようになる。一八九〇（明治二三）年には水戸に行幸啓した明治天皇・皇后のうち、皇后（のち昭憲皇太后）が常磐公園に行啓した。一八九五年には管轄が水戸市に移っている。

一九〇七（明治四〇）年の陸軍特別大演習の際には常磐公園が将校や在郷軍人会の園遊会場となった。梅の庭として全国に名が知られていく一方で、集会や運動の場として市民に広く利用されており、市民による普段使いの機能と観梅を中心とした観光機能が強い印象がある。やがて一九二〇（大正九）年に県に管理が戻ったのち、本多静六、田村剛などの学者によって顕彰され、一九二二年に名勝指定されるにいたる。一九三二（昭和七）年には「偕楽園」の旧称に復した。

第二次大戦では、好文亭が焼失するなど戦災被害を受けたが、偕楽園は文化財保護法に基づく史跡・名勝に指定されている（指定名称は「常磐公園」）。好文亭のちに復元された。二〇一五（平成二七）年には、斉昭が設立した藩校・弘道館や光圀が『大日本史』編纂のために開設した彰考館跡などの水戸の関連施設や岡山の閑谷学校などとともに、「近世日本の教育遺産群」として「日本遺産」に認定された。

高松栗林公園

起源は、一六世紀後半、当地の豪族・佐藤氏の庭園にあるといわれる。のちに讃岐国を治めた

生駒家の時代に築庭が進められ、寛永八(一六三二)年頃に栗林荘が築かれた。寛永一九(一六四二)年の生駒家転封によって讃岐国が分割されると、東讃地域には初代水戸藩主の子である松平頼重の入封によって高松藩が成立し、以後、高松松平家によって明治にいたるまで継続的に屋敷の建築と造園が営まれた。

明治維新後の版籍奉還により園地は官有となる。公園設置に関する太政官布達を受けて、当時の管轄主体である名東県は栗林荘の地を公園にすることとし、一八七五(明治八)年に「栗林公園」として一般に公開した。その後、一八八八(明治二二)年に香川県が設置されるまで県域が二転三転したことで行政管理がままならない時期もあったが、民間有志が組織した「甘棠社」が協力して公園を維持した。その甲斐もあって、明治中頃には送迎会や懇親会、あるいは戦勝記念祝賀会などの市民集会の場としても使用されていく。

一八九七(明治三〇)年には隣接する紫雲山を公園敷地に組み込み、園の中心部に博物館を新たに建設(一八九九年竣工)するなど公園整備が進み、一九〇三(明治三六)年には皇太子(のちの大正天皇)が行啓した。その後、宮内省技師・市川之雄らによる北庭改修が一九一三(大正二)年に完成したことで、栗林公園は、回遊式庭園を維持する近世的な南庭と、運動場などのレクリエーション施設を備えた近代的な北庭という二面性を持ち合わせるようになった。一九一四(大正三)年には皇太子(のちの昭和天皇)が淳宮(秩父宮雅仁親王)と光宮(高松宮宣仁親王)とともに行啓している。

栗林公園は一九二二(大正一一)年に史蹟名勝天然紀念物保存法に基づき名勝に指定され、一九五三(昭和二八)年には文化財保護法に基づき特別名勝となった。

広島縮景園

広島縮景園は広島藩初代浅野長晟が上田宗箇に元和六(一六二〇)年から築造させた。本丸の西、

京橋川のほとりにある。明治になって以降も浅野家が所有し(浅野泉邸)、日清戦争中大本営の副営として一八九四(明治一七)年、明治天皇の行幸を迎えた。浅野家は東北の二葉山に東照宮を勧請し、明治元(一八六八)年には名

を饒津神社と改め招魂祭が執り行われ、のちにその場は大政官公園となり、招魂神社が置かれる。

こうした慰霊空間との関係は第一部で述べる岡山と似ているのであるが、決定的に異なるのは縮景園が浅野家の所有であり続けたことである。最後の藩主浅野長勲は一九一三(大正二年)、園内に私立美術館、観古館を建てる。縮景園は一九四〇(昭和一五年)になって広島県に寄贈され、この年名勝に指定される。原爆で壊滅したが、その後復元された。⁽⁷⁾

熊本水前寺成趣園 ついで熊本水前寺成趣園である。加藤清正の熊本城創建時に城の南側に御花島が作られた。加藤氏に代わって入部した細川忠利は、寛永一三(六三〇)年から御花島に常住する。藩主の在住は明治四(一八七二)年まで続く。成趣園は三代綱利が寛文一〇(一六七〇)年から翌年にかけて城外に造営した。明治四(一八七二)年、廃藩置県により官有となるが荒廃したので、旧藩士たちが払い下げを要望し、一八七八(明治一二年)、細川家代々の当主を祀る出水神社を園内につくり、その社地として払い下げられた。一九二五(大正一四年)、熊本県が出水神社より借り受け水前寺公園となり、一九二九(昭和四年)に「水前寺成趣園」として名勝、史蹟に指定される。その後、一九六六(昭和四二年)に再び出水神社に返還され今日にいたっている。⁽⁸⁾

彦根玄宮園 彦根藩四代井伊直興によって延宝五(一六七七)年から着工され、同七年に完成する。明治五(一八七二年)、玄宮園は民間に払い下げられる。隣接する楽々園は直弼の第二子に譲渡されていたが、一八八一(明治一四年)年に井伊家より借り受けた業者が旅館「彦根楽々園」を開業する。一八八六(明治一九年)年に井伊家は玄宮園を買い戻し、民間に貸し付けて料理旅館として建物を使用した。彦根市が玄宮園・楽々園を井伊家から取得するのは一九四七(昭和二二年)であり、その後一九五一年に名勝に指定される。⁽⁹⁾

このように見てくると、所有者が誰か、ということは大名庭園の近代の歴史を左右するかなり大きな要素であ

ることがうかがえる。「公園」として開放されると市民広場の様相をみせる。旧大名家が近代以降も庭園を維持することは難しい。貸与したり、行政機関に買い取ってもらう。それらが名勝となるのは公のものとなってからである。そう考えると本書で扱う三名園＋一が早くに名勝に指定されていくのは、それが公的な空間となっていたから、つまり、公的な空間であることは名勝として顕彰されていくための必要条件であるといえる。さらにいうならば、本来の所有者である旧大名家が持っていた時には、歴史的記憶とともに大名庭園は生きていくが、所有が公的機関に移って名勝になっていく過程で、さまざまな知見による「価値づけ」が始まっていくのではないか。

緒論では、本書で描かれる大名庭園の近代の「現象」が何によるものか、ということ明らかにするためのキーワードを頭出しした。大名庭園の近代、とは大名庭園そのものの明治以後の単なる歴史事象を扱うのみではなく、大名庭園を通して近代とは何か、風景の近代化とはどういうプロセスかを読み解くところみである。個人の誕生日をお祝いするのが近代のものであるように、また〇〇何百年祭という記念日が近代のものであるように、そもそも日本三名園という扱いが近代的である。なぜ日本「三」名園なのか、なぜ四名園とはならなかったのか、ということも本書中に書かれているが、ここに現れる三名園、学識経験者、価値づけ、名勝への顕彰などはすべて近代の現象であり、構造化されたものである、ということをも冒頭に本書の予告として述べた。

- (1) 小沢圭次郎「明治庭園記」(日本園芸研究会編『明治園芸史』日本園芸研究会、一九二五年)。
- (2) 後楽園内の津田永忠遺蹟碑、一八九六年一〇月建立。「駕進みて岡山学校に幸し、後楽園に駐まること三日、茂樹嘉葩あり、怪巖奇石あり、鶴舞ひ魚躍れる庭園泉地の設は、最も天顔を怡ばす」。
- (3) 第二部、本書一六〇頁以下、および一八四頁以下。

- (4) 『岡山後楽園史』資料編(岡山县郷土文化財団、二〇〇一年)。原資料は松山市立子規記念博物館蔵。
- (5) 丸山宏『近代日本公園史の研究』(思文閣出版、一九九四年)。
- (6) のちの一九三二(昭和七)年国立公園法では、指定地すべてを国有に接取するのではなく、私有地の編入を認めたことから、国立公園とは指定を国がした、という限定的な national park であった。
- (7) 広島県教育委員会『縮景園史』(一九八三年)。
- (8) 北野修、黒田正巳、増田睦、川畑博「水前寺成趣園の歴史的研究」(『造園雑誌』四一(三)、一九七八年三月)。
- (9) 彦根市教育委員会『名勝玄宮楽々園整備基本計画報告書』(一九九七年)。

207, 209~211, 282, 446	
明治神宮	39
	や
靖国神社	57, 176, 283
山手公園	147
	よ
與楽園	148, 444
	り
六義園	441
陸軍第一七師団	52, 53, 57, 67, 96
陸軍特別大演習	446
栗林公園	159, 163, 309
栗林公園碑	282, 341, 342, 369, 421
栗林公園保勝会	410
栗林荘	9, 335, 336, 340
林泉回遊式	158

帝国博物館	353, 435, 437
帝室技芸員	359
鉄道院	277, 278
田園都市	299, 300
天狗党の乱	237

と

東京招魂社	176
東京美術学校	437
東讃電気軌道	399
(栗林公園)動物園	406, 417, 418, 421
常磐公園	159, 365, 383
常磐神社	233, 239, 242, 285, 310, 444, 448
特殊公園(歴史公園)	418
特別保護建造物	89
特別名勝	161, 334, 418, 421, 441
都市計画公園	63, 77
都市計画法	5, 65, 70, 85, 86, 88~90, 103, 110, 171, 297, 448
富山県物産陳列場	361, 371

な

内国勧業博覧会(第一回)	247, 248
内国勧業博覧会(第四回)	359
内務省古社寺保存会	435
内務省地方局	299
内務省都市計画中央委員会	168
ナチュラル・ガーデン	302

に

日露戦争	172, 287, 290, 446
日清戦争	156, 202, 203, 346, 351, 446
日本遺産	8, 313
日本三景	158
(日本)三公園	159, 162, 311, 365, 375, 379, 394, 443
(日本)三名園	3, 4, 11, 102, 157, 162, 165, 309, 334, 419, 441, 447
日本大博覧会	292
日本庭園協会	169
日本鉄道会社	252, 264, 265, 267, 270, 279
日本美術院	249

日本美術院岡山絵画展覧会	66, 67
--------------	--------

の

農商務省貿易品陳列館	353
------------	-----

は

パーク・システム	304
廃藩置県	339
版籍奉還	47, 339, 340

ひ

東山公園	51, 52, 62, 69, 72, 86
日比谷公園	169

ふ

風致地区	81, 84, 86, 88, 103
風致保安林	68, 86, 99, 101
(栗林公園)プール	406, 421
吹上禁苑	364
物産陳列所(場・館)	275, 325, 351
文化財保護法	8, 313, 418, 450

へ

平安遷都千百年祭	181
----------	-----

ほ

北陸巡幸	162, 184
保勝運動	164, 166
戊辰戦争	197, 204, 283

み

操山公園	70, 77, 79
水戸観梅会	267
水戸公園	297
水戸鉄道	252, 264
水戸の梅まつり	264, 280, 313
水戸八景	233
室戸台風	102

め

明治記念之標	41, 155, 157, 173, 174, 176, 181~183, 184, 191, 195~197, 201,
--------	---

弘道館 8, 232, 237, 239, 244, 248, 257,
261, 265, 268, 278, 280, 309, 313, 325
工部大学校 248
好文亭 233, 234, 239, 240, 242, 246,
248, 249, 250, 253, 255, 261, 269, 298,
310
後樂園 157~160, 162~164, 171, 258,
306, 307, 312, 334, 348, 349, 364, 375
後樂園津田永忠顕彰碑 282
後樂園用水 34
後楽公園 365, 383
国立公園 68, 82, 91, 100, 102, 105, 107,
108, 111, 301, 305, 398, 413, 421, 449
国立公園協会 77, 82, 91, 404
古社寺保存法 89
御真影(御写真) 245, 246, 257, 310, 447
金刀比羅神社(金比羅宮) 346, 359

さ

西郷隆盛像 283
桜山 233, 243, 256
札幌神社 39
讃岐案内 374
讃岐慈善社 346
讃岐鉄道 377, 378, 399
阿讃鉄道会社 346
讃岐民芸館 417
産業と観光の大博覧会 228

し

四国水力電気 399
閑谷学校 447
閑谷神社 6, 50, 51, 67, 110
史跡及名勝 307, 312
史跡及び名勝 313, 334, 450
史蹟名勝天然記念物保護委員会 415
史蹟名勝天然記念物保存法 5, 9, 63,
89, 94, 107, 140, 169, 171, 297, 307, 403,
448, 449
社寺保存内規 251
縮景園 9, 364, 450
招魂祭 5, 40, 67, 176, 206, 209, 210,

228, 346, 445, 446
渉成園 364
商品陳列所(場・館) 325
昭和大典記念大日本勸業博覧会 61
白河南湖 143, 450
神宮徴古館 381

す

水前寺公園 159, 441
水前寺成趣園 10, 364, 450
須磨離宮公園(旧武庫離宮) 394

せ

精義社 177
成巽閣 139, 141, 150, 162, 187, 204, 370
西南戦争 173, 174, 176, 178, 179,
181, 190, 204, 211, 447
瀬戸内海国立公園 111, 404
仙巖園 159, 441, 450
前賢故実 194
千波湖 233, 235, 252, 254, 256,
303~309, 311, 313, 325
千波公園 281

た

太政官公園 5, 7, 10, 38, 39, 41, 42, 46,
50, 52, 54, 62, 64, 73, 212, 444~446, 449
高外除地 5, 47, 340
高島公園 73
高松城(玉藻城)址 373, 378, 389
高松美術館 416, 417
竹橋事件 162, 186, 189, 190
太政官布達第一六号(1873年) 5, 6, 46,
47, 63, 109, 147, 148, 239, 240, 340, 444

ち

中教院 246
忠告社 177
朝鮮神宮 41

て

帝国奈良博物館 437, 438

【事 項】

あ	
赤坂離宮	381
熱田神宮	39
い	
石川県勸業博物館	153, 184, 186~188, 370, 372
伊勢神宮	39
茨城県勸業見本品陳列場	328
茨城県物産陳列館	278, 280, 328
う	
ウィーン万国博覧会	153
上野公園	148, 283
卯辰山公園	169
え	
盈進社	177
お	
大阪護国神社	176
岡山県物産共進会	49, 50
岡山県物産陳列場	66, 325
岡山城	30, 35, 36, 51, 70, 103, 445
岡山県立博覧会	48, 50, 66
奥市公園	56~59, 61, 62, 72, 73
御写真→御真影	
尾山神社	178, 181, 205
温故会	48
温知図録	184
か	
回遊式庭園	9, 19, 391
偕楽園	46, 157, 160, 163, 365, 375, 411
偕楽園記(碑文)	232, 235, 236
偕楽園臨時駅	264
加越能史談会	166, 169, 171, 449
加賀百万石	172, 173

香川県史蹟名勝天然紀念物調査会 (香川県)商工奨励館	403
	349, 350, 371, 417, 422
香川県商品陳列所	371, 376, 377, 405, 410
香川県博物館	350, 360, 371
香川県物産陳列所	360, 371, 376, 381, 384, 395, 400
花月日記	144
橿原神宮(神社)	39, 195
桂離宮	364, 365, 375
金沢博覧会	152
観光高松大博覧会	415
関西美術会展覧会	67
関西府県連合共進会(第六回)	353
関西府県連合共進会(第八回)	372, 380
甘棠社	342~445
観梅デー	264, 271, 277, 279
観梅列車	249, 264, 267, 277
き	
紀尾井町事件(大久保利通暗殺事件)	186, 202
久徴館同窓会	203
旧浜離宮庭園(浜離宮苑)	365, 441
京都博覧協会	359
金鵝勲章	195
く	
楠木正成像	284, 293
け	
元寇歴史油絵展覧会	66
玄宮園	10, 450
元治の変	200, 201
兼六園	306, 334, 370, 372, 375, 411
兼六公園	365, 383
こ	
小石川後楽園	232, 234, 365, 441
公園都市	304, 306, 312
公園保勝委員会	155
耕勝社	177

松平頼胤	336
松平頼聰	339, 373
松平頼豊	336
松平頼寿	411, 422
円中孫平	184
丸山宏	63

み

水島莞爾	184
三野雅一	408
水戸黄門	281, 288, 296
南為吾	65, 68
三好重臣	257

む

陸奥宗光	46
宗定克則	92, 133

め

明治天皇	4, 6~9, 39, 48~50, 53, 57, 62, 108, 110, 111, 156, 159~162, 181, 185, 189, 190, 195, 199, 237, 245, 246, 251, 257, 259~261, 263, 310, 447
------	---

も

本島正輔	71, 72, 84
本康宏史	3, 4, 40
森田柿園	182
守谷源二郎	308

や

安原加津枝	88
柳五郎	39
柳下鋼造	87, 91, 92, 102
柳下友太郎	361, 371
山県有朋	177
山口蚊象(文象)	413, 416
山口素臣	188~190
山田敬中	164, 165
山田梅村	341
山本忠司	417
山本利幸	92, 131

山森隆	156
-----	-----

ゆ

湯浅倉平	57
------	----

よ

浴姫	199
横地永太郎	201
横山篤夫	176
横山大観	249
吉村長策	52

り

李格非	143
李家隆介	165

ろ

ローレッツ、フォン・アルフレッド	151
------------------	-----

わ

和气清麻呂	45
和田文次郎	166, 187
渡邊清	239~241

375, 420, 442, 443	
豊田弥平	392~394
豊臣秀吉	335
な	
永井柳太郎	156
長岡安平	297, 299
中島卯三郎	41
中嶋節子	39, 88
永島良幸	48
中西厚道	54
中根金作	132, 417
中村文輔	337
中山喜多治	358~360
長山直治	138, 145
名越一庵	248
に	
西嶋八兵衛	335
西宮宣明	248, 249
西村茂樹	192
仁徳天皇	40
の	
納富介次郎	370
能川泰治	40
野口勝一	284
野崎政和	38
野見宿禰	194
は	
羽賀祥二	40, 174, 176, 180, 181, 195, 196, 206, 208, 210
林旅	41
原熙	7, 41, 95, 167, 169, 171, 449
原泰之	90
ハワード、エベネザ	299, 300
ひ	
飛田義春(美海)	292
日比重雅	68
平賀源内	336

ふ	
福富孝策	271~276, 279, 280
福羽逸人	41, 380, 381, 385, 394
藤川勇造	413
藤田勝重	342
藤田東湖	234, 265, 310
不破富太郎	200, 203
へ	
ヘーコック	206
日置謙	169, 172
ペリー、ジョン	248
ほ	
ボードウィン、アントニウス	148
細川綱利	10
ホルトルマン、アドリアン	151
本郷高德	384
本多静六	7, 8, 41, 90, 148, 169, 300~303, 306~308, 312, 380, 449
ま	
前田綱紀	7, 138, 172, 183, 212, 443
前田利家	183
前田利嗣	180, 197, 198
前田利常	183
前田利長	183
前田利為	204
前田齊広	7, 138~140, 142~144, 150, 168, 212, 443, 447
前田齊泰	139, 140, 142~144, 161, 168, 179, 182, 197~200, 212
前田慶寧	148, 197, 199, 200, 205, 447
正岡子規	4, 162, 255, 256, 263
松井乗運	184
松尾(片野)四郎	353, 435
松田正久	256
松平定信	142~144
松平頼重	9, 380
松平頼恭	336, 337, 380
松平頼桓	336

塩田真	350, 352~359, 363, 366, 369
シドモア、エリザ	228
渋沢栄一	295
島田一郎	202
清水裕子	89
下村観山	249, 353, 435
昭憲皇太后	8, 261~263, 447
昭和天皇	9, 53, 162, 447
白川哲夫	207
白幡洋三郎	127, 128, 160
神功皇后	194
進士五十八	93, 130
真龍院	141, 150

す

杉山岩三郎	52
スターケン、マリタ	206
スロイス、ピーター・ヤコブ・アド リアン	151

せ

関新平	240, 243, 245
関保之助	353, 435
セネット、リチャード	300
千秋順之助	200
千姫	42

そ

副田松園	184
------	-----

た

大正天皇	9, 59, 156, 376, 399
高木博志	39, 172
高島嘉右衛門	287
高松宮宣仁親王	447
高峰精一	151
武居高四郎	72
武石浩玻	263
武田五一	59
威仁親王妃(前田)慰子	197, 198
館残翁	166
龍居松之助	301

伊達政宗	40
田中伸稻	282, 286~289, 291, 292, 294~296
田中秀二郎	283, 294, 295
田中正大	325, 342
田辺朔郎	53
田村剛	6~8, 41, 62, 67, 77, 78, 82~84, 86, 90, 91, 94, 95, 99~102, 104~108, 110, 111, 169, 171, 301, 303~305, 307, 308, 311~313, 403, 413, 449

ち

千坂高雅	173
秩父宮雍仁親王	447
遅塚金太郎	265

つ

津田永忠	16, 19, 128, 131
津田南臯	184
土屋光逸	288
劔左衛門	183

て

貞芳院	239, 242, 310
寺崎良策	41

と

遠山美都男	195
富樫高明	190
徳川昭武	238, 261
徳川家斉	199
徳川斉昭(烈公)	7, 8, 45, 232, 234~237, 248, 251, 260, 282, 295, 300, 301, 304, 306, 309~313, 326, 329, 443
徳川光圀(義公)	8, 237, 260, 281, 282, 292, 295, 296, 310, 313
徳川慶篤	238
徳川慶喜	45, 238
徳川吉宗	129
徳川頼房	8, 232, 335
徳久恒範	351~354, 358~364, 367~371,

岡崎雪聲	393, 394
岡田磐	55, 56
小川一真	381
小川治兵衛	169
奥田武二郎	100
小倉右一郎	414
小沢圭次郎	4, 145, 159, 160, 254, 255, 263, 297, 299, 312, 344, 350, 352~355, 357, 363~369, 375, 379, 381, 382, 420
小野芳朗	171
小野良平	39
小野田元熙	380
折下吉延	41
オルコット、ヘンリー	346

か

香川真一	57
香川隆英	87
香川松太郎	406, 407, 409, 410
片山東熊	381, 437
勝姫	42
加藤清正	10
鹿子木小五郎	396
鎌田勝太郎	411
神尾守次	76
河合辰太郎	167
川田久喜	277, 294, 295
神原邦男	6, 20, 22, 23, 106, 111, 128, 129

き

菊池謙二郎	249
菊池武保	194
木子幸三郎	392~394
木越安綱	199, 204
岸光景	184
岸本豊太郎	52
北白川宮能久親王	257, 260, 261
木戸孝允	154
木畑道夫	94, 133

<

九鬼隆一	287
------	-----

久郷梅松	68, 70, 77, 78, 82, 84, 86, 100~103, 105, 107, 108, 111
楠木正成	109, 175
楠木正行	45, 109
楠宗道	71
久保秀景	341
窪谷逸次郎	71
グラント、ユリシーズ	251
栗田寛	239~241, 243, 248
栗原亮一	346
黒川良安	151
黒木欽堂(欣堂)	352, 353, 435, 436
黒崎勝男	95
黒田乃生	89
桑邱茂	57

け

景行天皇	182, 193
------	----------

こ

児島高德	45
児玉静雄	72, 76, 84
籠手田安定	190
後藤朝太郎	301
後藤近知	284
近衛篤磨	287
小堀遠州	76, 92, 95, 104, 105, 365
近藤磐雄	172

さ

西郷隆盛	175, 177
佐上信一	100
桜岡三四郎	291
佐々木亀次郎	45
佐々木玄孫	45, 53, 54, 56, 57
佐々木泉龍	184, 194
佐藤昌	41
佐藤雅也	40
三条実美	197, 198, 342

し

椎原兵市	41, 59, 390, 392~394
------	----------------------

索引

- *採録語句が章・節・項のタイトルに含まれる場合は該当頁をゴシック表記にし、その章・節・項内からは採録を省略した。
*後樂園、兼六園、偕楽園、栗林公園は、該当の「部」以外からのみ採録した。

【人名】

		市川之雄	9, 41, 57, 58, 380~385, 389~392, 394, 396, 397, 420
		市村塘	169
		伊藤覈	72
		伊藤博文	250
		伊藤平左衛門	350, 359~362, 369, 376, 417
		井上馨	197, 240
		猪熊弦一郎	416
		岩倉具視	39, 190, 197, 198
		岩田京子	89
		う	
		上田宗箇	9
		上原敬二	90, 94
		氏家栄太郎	166
		臼井洋輔	129
		宇都宮寛	97
		え	
		エミール、フォン・デル・デッケン	149~151
		お	
		大井清一	53
		大久保利通	186
		大久保頼均	339
		大隈重信	197, 287
		太田猛彦	85
		太田政弘	166
		大槻如電	254
		大村益次郎	40, 175
		大屋愷故	150
		岡倉覚三	352, 353, 358, 435
	あ		
饗庭篁村	266		
青山鉄槍	344, 365		
赤松景福	396, 404		
安喜子女王	47		
浅野純一郎	65		
浅野長晟	9		
浅野長勲	10		
荒木貞夫	397		
有栖川宮	257		
有栖川宮威仁親王	197~199		
有栖川宮熾仁親王	177, 197~199		
		い	
井伊直興	10		
池田章政	4, 6, 30, 42, 45, 48, 49, 51, 68		
池田継政	22, 23, 25, 31, 33, 109, 131		
池田綱政	6, 16, 19~25, 27, 31, 37, 93, 94, 108~110, 128, 443		
池田詮政	47, 48, 51, 68		
池田治政	28		
池田光政	6, 16, 19, 23, 30, 36, 42, 51, 67, 110, 128, 447		
池田宗政	33		
池田茂政	27, 42, 45, 48, 51, 68		
伊佐一男	208		
石井十次	45		
石原留吉	411		
泉鏡花	207		
板垣退助	256, 346		

◆著者略歴◆

小野 芳朗(おの よしろう)

1957年生。京都大学大学院工学研究科修士課程修了。博士(工学)。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授。

『〈清潔〉の近代——「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ』(講談社選書メチエ、1997年)、『調と都市——能の物語と近代化』(臨川書店、2010年)、『水系都市京都——水インフラと都市拡張』(編著、思文閣出版、2015年)。

本 康 宏 史(もとやす ひろし)

1957年生。金沢大学大学院社会環境研究科学学位取得。博士(文学)。金沢星稜大学経済学部教授。

『石川県の歴史』(共著、山川出版社、2000年)、『軍都の慰霊空間——国民統合と戦死者たち』(吉川弘文館、2002年)、『からくり師大野弁吉の時代——技術文化と地域社会』(岩田書院、2007年)。

三 宅 拓 也(みやけ たくや)

1983年生。京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科造形科学専攻博士後期課程修了。博士(学術)。

京都工芸繊維大学デザイン・建築学系助教。

『近代日本(陳列所)研究』(思文閣出版、2015年)、『京都 近代美術工芸のネットワーク』(共著、思文閣出版、2017年)、『描かれた都市と建築』(共著、昭和堂、2018年)。

だいみょうていえん きんだい
大名庭園の近代

2018(平成30)年5月31日発行

著 者 小野芳朗・本康宏史・三宅拓也

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版

〒605-0089 京都市東山区元町355

電話 075-533-6860(代表)

装 幀 小林 元

印 刷 西濃印刷株式会社

製 本

©Y. Ono, H. Motoyasu, T. Miyake 2018

ISBN978-4-7842-1909-4 C3021